

日本環境リハビリテーション科学研究会 セミナー

2018年5月26日

大阪府立大学 I-Siteなんば



日本環境リハビリ
テーション科学研究会
Japan Society of Environmental
Rehabilitation Sciences

本日の予定

1, 12:30～13:30

東日本大震災におけるリハスタッフの活動

兵庫県立リハビリテーション中央病院 若林 秀昭 氏

2, 13:40～14:40

災害時に役立つ手話を一緒に覚えましょう！

京都市聴覚障害者協会中京支部災害対策部 當間 正博 氏

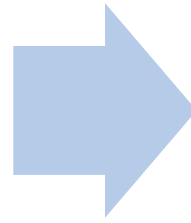
3, 14:50～15:50

災害時の障がい者の避難に関する研究経過報告 小島 久典 氏

4, 16:00～16:30

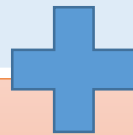
懇親会(無料) 話題提供 和歌山大学 今西 武 氏

東日本大震災では障
がい者の避難の援助
が発災から数日後



その数日が病状・障
がい・生活機能に大き
な影響を与えている

健常者・障がい者に関わらず，災害発生後すぐに避難することができ，一次避難所で安全・安心に，たとえ短期間であっても心身の負担を少なく過ごすことができるよう，平時にバリアフリー対策をすることが必要

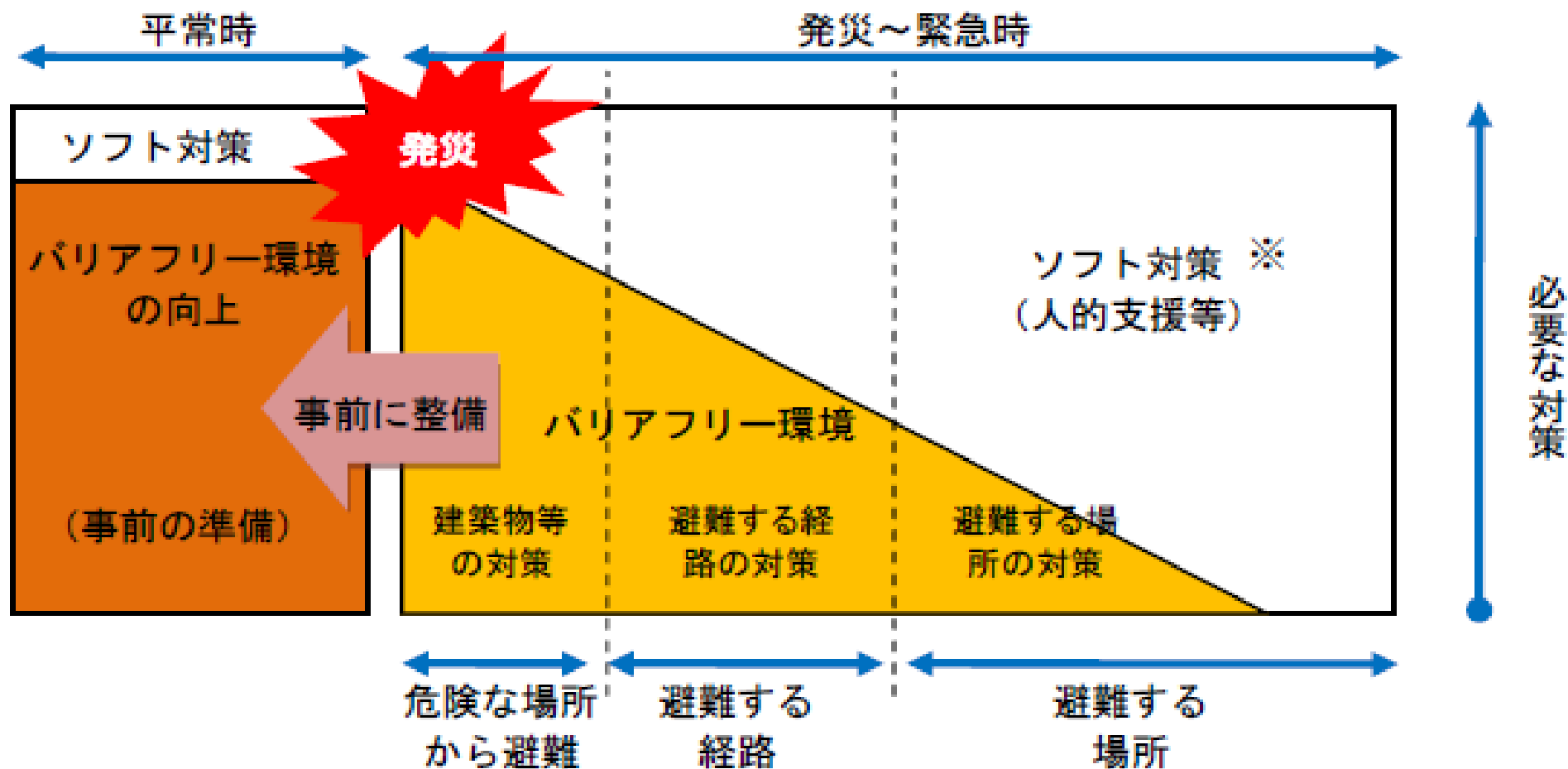


・障がいの基本的知識の普及

障がい者の身体機能に関する知識は一般的にはほとんど知られていない。糖尿病など基礎疾患は知られていても，そこから発生する機能障がいや日常生活に影響する動作の障がいなどは一般的ではない。

⇒一般市民が障がいの理解を深めることは，緊急時に対応をする時に大変役に立つ

障がい者の避難の対策を考える



高齢者、障害者等の災害時・緊急時の避難におけるバリアフリー化方策について
—災害時・緊急時に対応した避難経路等のバリアフリー化と情報提供のあり方に関する調査研究報告書とりまとめ— 平成25年度

災害時における障がい者の避難環境 と福祉用具に関する研究



日本環境リハビリ
テーション科学研究会
Japan Society of Environmental
Rehabilitation Sciences

先行研究

- 1) 住田幹男: 災害時のリハビリテーション.
リハビリテーション医学. 1997
- 2) 中村雅彦: あと少しの支援があれば. 2012.
- 3) Yumiko Kamioka, Fumika Itoh, et al.: Evaluation of the evacuation drill for persons with motor disability in the event of a big earthquake, 2014. (in Japanese)
- 4) Hisanori Kojima, Toshiyasu Inumaru: Current Status of People with Disabilities and the Problems-They Encounter in an Evacuation Environment during a Disaster Situation. 2016

被災者の状況やシステムに関する論文, 現況調査が主体.
リハビリテーションの視点による
介入報告・具体的提案は非常に
少ない

研究目的



東日本大震災の経験から、災害時における障がい者の避難において平時に対策可能なバリアフリー環境を明らかにする



障がい者の避難環境に関するバリアフリーの実態調査を実施し、必要な福祉用具を明らかにする

結果の概要

福島県



被災状況

- ・避難所まで遠かったため移動が出来なかった。
- ・自宅は物が散乱して動けない。
- ・障害者は状況判断が難しく、動いた方がいいか判断できない
- ・電動車いすは重く動けない、操作もわかりにくい。
- ・障がい者の介助サポートに小中高生が活躍した。
- ・軽度障がい者が他の障がい者をサポートする必要性があった。
- ・動ける高齢者が要支援者をサポートしなければならなかった。

避難所の様子

- 避難所の広さが狭く入りきらず十分ではない
- 避難所に着いてもバリアフリーでなく、トイレに行けず、食事の配給に並べない。
- 避難所が狭いので迷惑がられた。

その他

- 洋式トイレを希望したが、情報が伝わっていなかったため物品が届かなかった。
- 消防団員がいた避難所は障がい者に配慮してくれたが、いないところは配慮も運営も進まなかった。
- 自治体が来ない避難所も多かった。

結果の概要 岩手県



被災状況

- ・地震発生後、障がい者が不安が強く、安全性が保たれないため昼夜職員交代で障がい者の対応した。
- ・地震発生から8日間不自由が続き、その後避難所がやっと開設した。
- ・沿岸部には車いすなどの障がい者は少なく、沿岸部の車いす等の障がい者は内陸の施設に入所しており、若年障がい者などは自宅に引きこもっていた者もいた。

- ・避難した障がい者がやっとたどり着いた一般の避難所では、周囲から迷惑だと言われていた。
- ・車いすの方は比較的支援を受けられやすかったが、精神疾患の方は精神障がい者とわからないので気づいてもらえず、支援を受けられなかった人が多かった。

避難所の様子

- ・バリアフリー化された避難所は非常に少なかったが、ボランティアや近隣住民のサポートで過ごした。普段から状況を知っている隣近所が積極的に声をかけていて重要なマンパワーとなっていた。

その他

- ・対応が市町村により異なり、陸前高田市は市町村側からの声かけ確認等積極的な関わりが多かった。
- ・発災から5年経過したが全国の障がい者の個別避難計画は11%程度であることが明らかになった(2016.9)。



避難所の様子

- ・車いすがなく、移動できない障がい者は避難所内のその場にとどまるのみであった。
- ・支援センターより1台車いすの提供があったが、明らかに不足していた。
- ・リヤカーはあったが、小学校周辺でも整地されていない場所が多く利用できなかった。
- ・避難所の前に警察学校があり、スペースが確保できたため高齢者・障がい者・乳幼児はそちらに移動した。人手が必要で総勢50人位で移動した。



- ・障がい者の把握に市町村から情報提供のあった自治体と、無い自治体が認められた。その為自治体と避難所運営者の温度差が大きく、障がい者の状況把握が困難であった。⇒提供する方針
- ・避難所のトイレが和式であり使用できなかった避難者がいた。
- ・1000人規模の避難所で**障害者用トイレは1箇所のみ**であった。
- ・洋式化する福祉用具を使用した^が、トイレのドアが開かなくなり利用できなかった

- ・車いす女性が殴られ警察が介入。携帯も盗難にあっていた。
- ・名簿の作成が必要だが、1000人分の名簿チェックは困難
- ・要援護者の氏名がわかっても顔がわからずサポートできず、リスト作成や確認に多くの時間が必要であった。

結果の概要

熊本県

(福祉避難所)



被災状況

- ・本来指定避難所ではないが土地が広く、建物が比較的新しいため最大1000人程度自然に避難してきた。
- ・避難してきたのはほぼ在宅の方で体育館マットの上に横たわっていた状態。

避難所の様子

- ・教室を開放したが、障害者用トイレが遠く、トイレの数も少ないため、近年整備された大ホールを開放した。大ホールには車いす障がい者など最大60人程度避難生活を過ごした。
- ・本来は福祉避難所ではなかったが結果として福祉避難所となった。

仮設住宅・その他

- ・一般避難所が障がい者を受け入れない理由として障がいの状況がわからず、知識もないため、何かあったときの対応が出来ないと思いつ断っていた様子。
- ・仮設住宅は東北と同じでバリアフリーは共同スペースのみ。障がい者は困難であった。高齢者も多いため全棟バリアフリーが必要。
- ・家が片付いていないため帰宅困難が多かった。福祉ボラは1週間たってようやく来た。
- ・名簿作成にも時間がかかり役に立たなかった。名簿作成に学生は経験が少なく聞き取りの姿勢が取れないため、経験者が必要だった

結果の概要

鳥取県

被災状況

- ・家屋倒壊がなかったことや避難所における要援護者数が少なかったため対応しやすかった。

家屋倒壊の有無による影響が大きい

避難所の様子

- ・各避難所を保健師が巡回し、要援護者・高齢者16名をピックアップし一次避難所から福祉避難所へ移動した。
- ・家屋倒壊がなかったため、重度の障がい者はすぐに帰宅し、独居の高齢者などは市が管理する福祉避難所へ移動できた。
- ・避難所は小中学校が大半で洋式のトイレが少なく、高齢者が不便さを感じていた

仮設住宅・その他

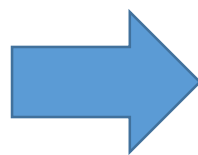
- ・市が福祉用具業者と提携しているためマットレスをすぐに準備することが可能であった。ダンボールベッドの確保には1週間程度の時間がかかった。

考察1

(1)大きな共通点
車いす利用者の移動・スペース

避難所への移動,
避難所内の困難さ

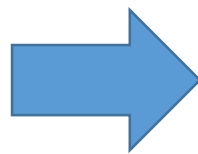
リヤカーは路面状況の凹凸により利用が困難



平時における移動経路や避難所内での移動の方法の確認

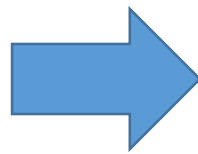
トイレまでの距離

障がい者用トイレ数の不足



距離を考慮した障がい者対応トイレの増設

長時間・長期間, 車いす上に座ったまま臥床できない



運動用マットではなく, 臥床用マットレス

考察2

(2) 介助者の必要性

移動やトイレへの移乗など
介助を必要

介助の方法を知る
(知っている) 人手

医師・看護師・薬剤師などは緊急対
応で手一杯

簡単な移乗介助や移動サポー
トのできる人材育成

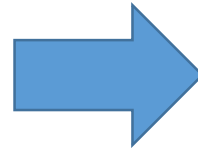


理学療法士や作業療法士の
積極的な
協力・活用が望まれる

考察3

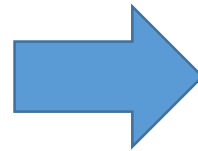
(3)避難所や仮設住宅の更なるバリアフリー

避難所内で配給を受けるための
移動が困難



配給時の配慮

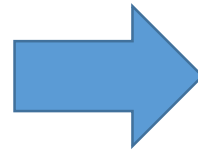
仮設住宅はバリアフリーで
はない



仮設住宅のバリアフリー
の標準化, 仮設住宅改
修のマニュアル化

和式便器が
非常に多い

福祉用具を活用
しても一般では適
切な利用が困難



知識・技術が一般的ではないため、
福祉用具の活用の周知や福祉用具
をよく知る
リハビリテーション専門職の活用

考察4

(4)避難所での障がい者の受け入れ

一般市民が障害の状況が理解できず、避けてしまう傾向

避難者自身に余裕がない

どの様にサポートして良いかわからず、障がい者から離れてしまう市民

大きな声が出てしまう方

不穏な行動を示す方

一般市民への障害の周知伝達の工夫

迷惑行為をされる

周囲への影響を配慮し、個室の充実

まとめ

- ・一次避難所の障がい者向けスペースが不十分。⇒福祉避難所の充実
- ・避難所スペースからバリアフリートイレまで距離があり、
距離の短縮が必要。⇒トイレの設置位置
- ・車いすの必要台数を算出し、車いすの常設化と室内段差の解消が必要
⇒システム・方法の提案
- ・現在指定されている一次避難所のバリアフリーに関する
詳細の調査が必要 ⇒調査研究の継続が必要
- ・避難所で活用可能な福祉用具の利用方法の汎化と一般への障がい者
の基本的知識の教育が必要 ⇒教育の機会を更に設ける
- ・バリアフリー化された仮設住宅の設置が求められる⇒調査・要望・開発